原発避難者の声を聞く(2)

・「住めないと頭では分かっているんだけれども戻りたい」という複雑な気持ちですね。そして、「戻りたい」というのは「住む」ということじゃないんだよね。「残したい」という話になってきたりとか----。（子育て女性）

タウンミーティングの様子（2015年2月，東京都八王子市）

・秋の一時帰宅ではじめて高校生の子どもを（富岡町の家に）連れて行きました。（傷んでしまった）家を見れば（帰還を）諦めると思ったら、（子どもが）「また来るに決まってるじゃん、ここで生まれたんだし。町が地図から消えるの？」って言うんです。（子育て女性）

・（高齢の父に）「お前が（富岡町に）戻ってきて住める頃になったらお父ちゃんくらいの歳になっている----頼むぞ」って（言われた）-----。（世帯主）

・行政区内は家族みたいにみんな知ってたから-----そういうお隣さん、ご近所さんがいなくなったというストレスはすごいですね。（高齢者）

・（富岡）町にいれば-----老人の独り暮らしだって怖い思いして暮らしていかなくてよかったかもしれないけども、いま、いわきで独り暮らししていると「独りでこんなところで（いたまま、いつか自分）は死んでいるかもしれないんだ」と思っちゃいます------すごく不安です。（高齢者）

・自分自身が置かれている立場について説明がつかないので、どこに住んでいいかわからないのだと思うんです。借り上げ住宅なんて、いつまでも住んでいられないんです。（高齢者）

・地に足をつけて生活ができれば、ほとんどのものは解決できると思うけど、そういう状況になかなかなれない。見通しがつかない生活が続いて、こういった生活をいつまで続ければいいか本当にわからない状態。それが重荷になっている。（高齢者）

・（避難者を）受け入れてくださっている地域の変化を多くの方（避難者）が最近ひしひしと感じるようになって、それが（避難者に）また別のストレスとしてかかり始めている。（高齢者）

・前は（避難先の住民も）「大変でしたね」って温かく受け入れ（てくれ）た部分が、周りはだんだん厳しいとらえ方で、今は少しずつ変化している。（子育て女性）

・最近、私は「避難」ということばは使わないようにしたんです。「いわきにお世話になっているんです」ということで（考えるようにした）。（「避難」というと相手が）何

だか重荷に受ける感じみたいで、だからなるべく使わないようにしています。（高齢者）
・（いわきでは）「あんたらが来ているから、道路が混むんだよ」というようなことを（地元の住民から）言われますよね。（私は）そういうことを言われるのは嫌だから、隣はマンションなんだけど、隣の人とは挨拶する、仲よくする、喋って----そういうふうなこと（交流）はやっているんです。そういう（気を遣う）ことは多いですね。（高齢者）
・みんな、好きで県外に避難したわけじゃないのに、と思う。最初は、例えば娘さんがいるとか、弟さんがいるとか、そういうことで（県外へ）動いて、（県外の）親類を頼って動いたという、ただそれだけのこと。それに対して「（県外に）出ていったからどうだ」とか、そういうのはないと思うんです。（世帯主）
・（帰還をめぐる）リスクはどっちでもあるはずなんですよ。（県外に）出ていった人はリスクがないというと、実はそうじゃなくて、（県外で始める）商売だって「やるしかないべ」って賭けみたいな話。（県外であっても）やっぱり「覚悟を決めてやる」というリスクを背負うわけですよね、生活をするためには。（世帯主）
・健康被害は 5 年ぐらい経ってから放射線の影響が出てくるとかという話があったように、将来的な不安がある。子どもたち、孫も含めても将来的な不安というのは、ずっと付きまとっていくというか、そういった負のものを背負わされてしまったと、本当に思います。（世帯主）
・健康の問題とか将来に対する不安などはなかなか口にしにくいし、心配しないようにしている。でもきちんとした長い時間の中で、どうであったか考えたいという（気持ち）、不安には答えてほしい。（子育て女性）

（2015 年 6 月 18 日）